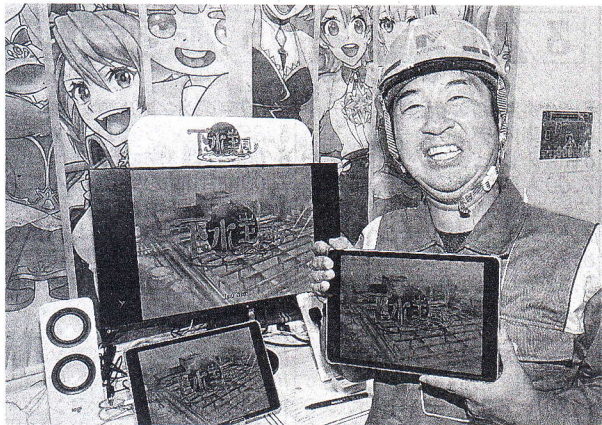


# 下水道 ゲームで推して

もしもこの世界から下水道が無くなったら――。下水道管の老朽化が社会問題となるなか、水インフラ事業などを手がける「明電舎」(東京都品川区)が、下水道処理の仕組みを学べるゲームアプリを開発した。その名も「下水王国」。数千万円の開発費用を投じた本格派ゲームで、下水道への関心を高める狙いがある。

## インフラ業者 開発



ゲーム「下水王国」を開発した明電舎の中川彰利さん  
川千葉市美浜区中瀬2丁目

ゲームは下水処理場の機能停止により、人類滅亡の危機に陥った仮想の世界が舞台。微生物を擬人化したキャラクターをあやつりながら、「敵」となる汚染物質を除去し、浄化した世界を取り戻すという設定だ。開発したのは同社でオゾン技術開発課長を務める中川彰利さん(45)だ。下水道処理事業に携わって20年。老朽化した機器の更新を行政に提案しても、「予算が付かない」という理由で何度かはねられた。「世間の無関心さ」を幾度となく痛感してきた。

「予算を付けるには市民の理解が必要。根底にある、下水道へのネガティブイメージを払拭できないかと考えた」

就職活動ではゲーム会社が第一志望だったほどのゲーム好き。スマートフォン

## 微生物キャラで水浄化 老朽化考える契機に

の人気ゲーム「ウマ娘 プリティーダービー」が世間の競馬へのイメージを変えたように、下水道をテーマにしたゲームを作りたいことを思いついた。

2023年にあつた社内でのアイデアコンテストで発表すると、社員投票で次点に2倍以上の差をつけ、事業化に向けて動き出した。

ゲーム開発でこだわったのはリアリティーだ。

一般的に下水処理場では、微生物が汚れを食べ、水をきれいにしている。微生物の動きを活発にするため、空気を送り込んだりかき混ぜたりする作業が重要となる。

「下水王国」のキャラクターは、アメーバやジオバクターなどの微生物をモチーフにした。プレーヤーは、油やヘドロ、ご飯の食べ残しといった「敵」に、どの微生物が有効かを瞬時に判断して攻撃する。

汚れを取り逃がして水質が悪化したり、空気を何度

も送り込んで大量のエネルギーを消費したりすると、ハイスコアは得られない。実際の下水処理にも通じる難しさを各ステージにちりばめた。

開発を担った大阪市のゲーム会社「クローバーラボ」のゲーム事業部ディレクター、三好孝和さん(34)は「正直、下水道がゲームになるのか想像がつかなかった」と明かす。

微生物は動きが鈍く、丸い形のものが多いため、デザインを描き分けるのに苦労したといい、「ぜひ推しの微生物を見つけて欲しい」と語る。

擬人化したキャラクターの声は、人気声優の佐倉綾音さんが担当する。今年度中の発売を目指しており、スマホや任天堂の家庭用ゲーム機「ニンテンドースイッチ」での有料ダウンロードを想定している。

「下水道は生活する上で大事だが、無くなって初めてありがたみに気づく」と中川さん。「『下水王国』で遊びながら水処理の知識を学んでもらいたい。下水道管老朽化の解決の一助になれば」

(堅島敢太郎)